悪女入門

ファム・ファタル恋愛論

鹿島 茂

講談社現代新書
1667

悪女入門
鹿島茂
講談社現代新書

ISBN4-06-149667-0
C0297 ¥700E (0)
定価：本体700円(税別)

たファム・ファタルもその資本主義が通りすぎたあとでは、「血と膿でどろどろになって、シャベルでクッションの上に投げ出されたみたいな、腐った肉の一山」として死んでいく「運命」にあるのです。

「ヴィーナスが腐爛してゆくのだ。まるで彼女自身が、清泥のなかに放り出されている屍肉から拾ってきたあの病菌、それで大勢の男たちに毒をふりまいてきたあの腐敗菌が、彼女の顔にまでのぼってきて、腐らせてしまったとでもいうみたいに」

この病菌、それこそが近代資本主義という病毒なのです。

嫉妬の痛み

十七世紀フランスのモラリスト（人性観察家）であるラ・ロシュフーコーは、愛と嫉妬との関係について、こんなことを言っています。

「嫉妬は必ず愛とともに生まれるが、必ずしも愛とともに死なない」

これは、一度でも恋愛というものを経験したことのある人にとっては、すぐに理解できる真実です。しかも、まことに厄介な真実です。なぜなら、愛などとっくになくなってしまっているのに、嫉妬だけはいつまでも長生きして私たちの心の中に居座り続け、チクリチクリと、心の壁を針で刺すことがあるからです。その痛みというのは、一種独特のもので、それを免れようとすれば、よほどのことをしなければなりません。

マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の第一篇の「スワンの恋」は、嫉妬から癒されるために、その「よほどのこと」、つまり「結婚」をしてしまった男の物語です。

好みではない女に恋するとき

「スワンの恋」の主人公シャルル・スワンは、株式仲買人の息子という成り上がり階級の一員でありながら、最高級の貴族サロンに出入りを許された上流社交界きっての寵児です。それというのも、スワンは、美術や音楽などに関して、どんなプロにも負けないような洗練された鑑識眼を持っているうえ、会話がとても巧みなので、どこの上流サロンでも引っ張りだこなのです。

ところで、こんなにも芸術的にすぐれたセンスをもっているスワンですが、その彼が、現実の女性にどのような特質を求めているかといえば、意外なことに、いたって健康的で豊かな肉体でした。

「奥深い表情や憂愁は、彼の官能を氷らせてしまい、これに反して健康でぽっちゃりしてバラ色の肉体がありさえすれば、たちまち彼の官能は目ざめるのであった」（鈴木道彦訳・集英社　以下引用　同）

少し例が古いのですが、外国女優にたとえてみれば、スワンは、シャーロット・ランプリングのような陰影のあるタイプではなく、アン・マーグレットのような健康美人が好きな男だったのです（なにを隠そう、私も、スワンと同じ趣味です）。

つまり、スワンは、現実の欲望と夢とのあいだに画然たる一線を引いていて、実生活では、自分が称賛する画家や彫刻家が描くような女性とは正反対の女性を好きになっていたのです。

したがって、ある日、劇場で旧友から、高級娼婦オデット・ド・クレシーを紹介されたとき、スワンは、欲情をそそられるどころか、一種の肉体的嫌悪感しか覚えませんでした。オデットは、スワンの好きなタイプの健康美人ではなかったのです。

「男にはみな、それぞれ型は異なるが、官能の要求するタイプと正反対の女がいるもので、オデットはそういう女の一人に見えたのである。彼の好みと比べて、オデットの横顔ははっきりしすぎていたし、肌は弱々しすぎたし、頬骨はでっぱりすぎ、顔立ち全体がやつれているように見えた」

積極的に出たのはむしろオデットのほうでした。オデットは彼に手紙をよこして、ぜひあなたさまのコレクションを見せていただきたいと言って、交際のきっかけをつかもうとします。しかし、スワンにはほとんどその気がありませんから、次の訪問まで、オデットがどんな顔だったかを忘れてしまいます。

「彼女が訪ねてくるたびごとに、その顔を前にして、いくらかはぐらかされたような気持を味わった。彼女と話をしているあいだ、スワンは、この女の持っている大そうな美しさが、すんなりと好きになれるような類いの美しさでないことを残念に思うのだった」

ところが、不思議なことに、スワンはオデットが目の前からいなくなると、もしかするとオデットは自分にとって好ましい女ではなかったのかと思いかえすようになります。

このように、世の中には、女性が目の前にいるときには、なんの欲望も抱かないのに、女性がいなくなったとたんに恋の疼きを感じる「不在恋愛症候群」とでも呼ぶべき特殊な心の病におかされている男がいるものなのです。

こうしたタイプの男にとって、女性の不在こそが恋を加速させるアクセルで、女性の現前は、反対に恋のブレーキになります。

そのため、オデットと頻繁に会っているうちは、とんと恋心などというものは抱きませんでした。

オデットに特別の感情を抱くようになったのは、オデットが唯一出入りを許されているヴェルデュラン夫人のサロンにスワンを誘ったときのことです。

スワンは、そこで作曲家ヴァントゥイユの創ったソナタの小楽節を若いピアニストが演奏するのを聞き、かつてなかったような幸福感を味わいます。そして、そのソナタから受けた印象を未知の女との出会いのアナロジーで理解しようとします。

「それはきわめて特殊なもので、ごく個性的な魅力を備えており、何ものもそれにとってかわることができそうもなかったので、スワンはまるで、道で出会ってすっかり惹きつけられてしまった女、もう二度とめぐり会えないだろうとあきらめていた女に、親しくしているサロンで不意に顔を合わせたような思いだった。とうとうしまいにその女は、先導するように、すばやく、よい香りをあたりにただよわせながら、スワンの顔にその微笑の反

映を残して遠ざかった」

ここで少し文学的な脱線をしますと、スワンがヴァントゥイユのソナタから受けた印象を、「道で出会ってすっかり惹きつけられてしまった女」という比喩であらわしているのには、あきらかにボードレールの「見知らぬ女に」という名詩の影響があります。すなわち、ボードレールは、現代生活というのは、道で見知らぬ女とすれちがって激しく惹きつけられながら、次の瞬間にはもう別れて永遠に会えなくなる、そうした出会いのような、つかの間の快楽の繰り返しだと喝破したのですが、スワンは、こうした文学的な教養を背景に、現実をとらえようとしています。

じつは、この態度にこそ問題があるのです。現実の中の自然を、芸術家が非現実の中で創った人工をもって饗え、そこにアナロジーの橋を渡そうとするスワンの態度、まさにこれが、スワンに大きな不幸をもたらすことになります。

「物語」を現実と錯覚する悲劇

まず、スワンはヴァントゥイユのソナタから受けた、道で出会って魅せられた女にサロンで再会するというストーリーを、自分とオデットの出会いに重ね合わせてしまいます。

「彼は小楽節をそれ自体として――（中略）――見るよりも、むしろこれを自分の恋愛の

しるしのように、その記念のように、ヴェルデュラン夫妻にも若いピアニストにも彼と同時にオデットのことを考えさせ、二人を結びつけるもののように見なしていた」

ついで、スワンは自分の大好きなボッティチェリの描くチッポラの肖像画のイメージでとらえようとします。いいかえれば、スワンは現実のオデットをそのものとして見るのをやめ、チッポラの肖像画のモデルを探し求めるようにしてオデットを眺めていたのです。

「彼はオデットを見つめるのであった。彼女の顔、彼女の身体には、壁画の一部があらわれている。そのとき以来、オデットのそばにいようが、あるいは離れてただ彼女のことを思っているだけであろうが、スワンは常に壁画のこの部分をそこに探し求めた」

こうしたスワンの態度は、私たち一般人から見ると、相当に変わっているように感じられます。はっきり言って、どうかしているのです。

しかし、では、私たちが、こうした態度からいっさい無縁かというと、むしろ、その反対であるように思えます。つまり、私たちは、恋愛において、多かれ少なかれ、こうしたスワンと同じようなことをやっているのです。

たとえば、あなたは、今の恋人をどういう基準で選んだのでしょうか？

案外、『ダイタニック』のディカプリオに笑顔が似ているとか、トレンディ・ドラマの反町某に眉間の皺がそっくりだとか、そういう理由で「好き」になったのではないでしょ

うか？　そして、友達に、「ねえねえ、私の彼氏、ディカプリオ（反町）に似ているよね」などと言ったりしてはいないでしょうか？

こう尋ねられた友達は、決まって、あなたに「えぇー！　どこが？」と答えるはずです。

すると、あなたは、「やっぱ、似てるよ。だって、そっくりだもの」と、ほとんど理由にならない理由をあげて擁護します。

この瞬間、あなたは、まさに「スワン症候群」に陥っているのです。つまり、現実の彼氏をしっかり観察し、いささか自分の趣味ではないと断定するかわりに、自分の好きな俳優とのほんのわずかな類似にすがって、「私はこの人が好きだ」と思い込んでしまうのです。いいかえれば、あなたは非現実の作り出す「物語」の夢に欺かれて、現実を見ずにいるのです。スワンとのちがいは、非現実が、ヴァントゥイユのソナタやボッティチェリのチッポラという高尚な対象ではなく、ディカプリオや反町といった通俗的なそれであるということにすぎません。構造的には、まったく同じなのです。

そして、この錯覚から生まれる悲劇もまた同じです。プルーストは残酷にも、前もって、その悲劇を予告しています。

「しかし彼は忘れていたのだ、そうだからといって、けっしてオデットがそのためにいつ

そう彼の欲望にかなう女になったわけではないことを」

そう、これなのです、あなたが毎度繰り返している、好きでもない男とすぐに一緒になって離れるという愚行の原因は。好きな俳優にどこかが似ているからといって、その男が、その俳優になるわけはなく、自分の「欲望にかなう」男になるわけはないのです。

しかし、「物語」による思い込みの構造はまことに強いものがありますから、毎日、いや毎時間、地球上のどこででも、こうした無数の「スワン」たちが誕生しています。

ですが、考え方を変えて、この構造をしっかりと研究するなら、あなたが無敵のファム・ファタルに変身できる可能性があるともいえます。

すなわち、相手の男の「物語」を適確に見抜いて、その「物語」の中に入り込むことができたなら、男は、たとえあなたが「欲望にかなう女」でなかったとしても、コロリとまいってしまうかもしれないのです。

その手練手管をわきまえたファム・ファタル、それが「スワンの恋」のオデットにほかなりません。オデットを研究することは、常に男に勝つファム・ファタルの道へと通じているのです。

男を「芸術鑑賞モード」に誘う術策

まことに不思議なことですが、私たちの眼というのは、ある瞬間に、面前にある「現実」を見ているはずなのに、実際には、それを超えた彼方にある「非現実ななにか」を見てしまうことがあります。その摩訶不思議な現象の最たるものは、絵画、とりわけ芸術絵画と呼ばれるものを見るときの私たちの心のモードです。現実の絵画は、物質的にはいくつかの絵具の堆積にすぎません。眼を近づけて見れば、そのことは明らかです。

ところが、一定の鑑賞距離からそれを眺めると、その絵具の堆積が、この世のどんな美女よりも美しい彼岸的な美女に見えることがあります。このとき、私たちは、絵具の堆積という現実類似物（アナロゴン）を介して、非現実を見てしまっています。サルトルが『想像力の問題』で指摘したように、この瞬間、私たちの心は、想像力を最大限に働かせる「芸術鑑賞モード」に入っているのです。

よく、たいした美人でもないし、スタイルも頭も悪いのに、やたらに男にモテまくって、周囲の女性たちの怨嗟の的になっている女性がいます。こうした女性は、じつは、いま言った「芸術鑑賞モード」に男たちを誘うのが得意なのです。つまり、自分の肉体をアナロゴンと化して、男たちに、非現実な美女を見させる術をしっかりと心得ているわけです。

オデットは、この手のアナロゴン美女の典型でした。肉体的にはスワンの好みにまったく合わず、趣味も通俗的で俗悪なのに、スワンを「芸術鑑賞モード」に誘う術策にたけていたために、まんまとスワンの心の中の理想の美女になりすますことに成功します。

その手口のいくつかをこれから具体的に見ていきましょう。これは「ファム・ファタル学」の基礎となる課目ですから、しっかり記憶しておいてください。あとで必ず役に立つはずです。

一つは小道具を使うという手です。相手の男の心がどんな「物語」を求めているか、言いかえれば、男がどんなきっかけで「芸術鑑賞モード」に入りやすいかを見抜いて、その「物語」を誘発するような小道具を使うのです。

オデットが主として用いたのは、当時はそれほど一般的でなかった、キクやカトレアなどのエキゾチックな花です。

「ある晩、彼女が馬車から下り、彼がそれじゃまた明日と言ったとき、オデットは、つと家の前の小さな庭から最後のキクを一輪摘むと、まだそこにいた彼に差し出した。それを彼は帰る道々、じっと唇に押しあて、また何日かして花が萎んでしまうと、大切に机の抽出しにしまいこんだのだった」

じつは、スワンは前年からキクが流行していることをいまいましく思っていたのです

が、オデットの部屋のオリエンタルな趣味にかなっていたので、キクを「介して」オデットに触れるような気がして許してしまうのです。

すると、オデットは畳み掛けるようにして、この路線の小道具を繰り出してきます。サロンの控えの間には「まるで温室のように一列に大輪のキクが咲いて」いるばかりか、サロンの壁のくぼみには、「大きなシュロの木とか、写真や結んだリボンや扇子などがとめてある屏風」が配してあります。

しかし、こうしたモノだけでは男の「物語」に入り込むことはできません。必要なのは、そうしたモノと自分の肉体を結びつけて男に記憶させることです。

「［オデットは］たくさんの神秘的な壁のくぼみの一つにスワンを招いて、自分の傍らに坐らせるのであった。そして、『そんなふうにしてらしちゃ、お楽じゃないでしょ。ちょっとお待ちになって。うまく直してさし上げますわね』と言うと、何か特別な発明をしたときにでもするように、さも得意げに小さな笑い声を立てながら、まるで貴重な品も物惜しみせず、その値打などどうでもよいと言わんばかりに、日本絹のクッションをくしゃくしゃにして、スワンの頭のうしろや足の下に宛てがうのだった」

キク→シュロ→扇子→屏風→日本絹のクッション。さながら連想ゲームのようなモノの繰り出し方で、それこそ、ガイジンのオリエンタリズム、ジャポニスムそのものです。は

っきり言って俗悪極まりないのですが、しかし、これらのモノがオデットの「小さな笑い声」やなにげない動作と連結されると、スワンの心の中に、一つの幻影、アヴァンギャルドでいながら洗練された趣味の持ち主というイメージがつくりだされていくのです。

小道具の次は、スワンの感覚、とりわけ味覚に訴えるという戦術です。

「オデットはスワンに『彼の』紅茶を淹れてだすねる、『レモン？　それともクリーム？』スワンが『クリーム』と答えると、彼女は笑いながら、『ほんのぱっちり、でしょ！』と言う。そして彼がおいしい紅茶だと言うと、『ほうら、お好きなものはちゃんと分かっているんですよ』事実この紅茶は彼女自身もそう思ったのだが、スワンにとっても何か貴重なものに見えた。そして恋愛というものは、いろいろな喜びのなかに自己の正当化と、愛情が持続する保証とを見出す必要があるので（中略）スワンが七時に彼女と別れて夜会服に着かえるために家に帰るとき、彼は馬車に揺られているあいだ中、その日の午後が彼にもたらした喜びを抑えることができずに、繰り返し自分にこう言いきかせていた。『あんなふうに、めったにないおいしい紅茶をご馳走してくれる可愛い女がいるっていうのは、なかなか悪くないものだ』」

ここで注目すべきは、紅茶そのものよりも、オデットがそれをスワンに「彼の」紅茶として差し出すことで、紅茶を特権化してみせたことです。恋愛というのは、モノそのもの

よりもモノに込められた関係から生まれるものだからです。オデットは「彼の」紅茶と言ってそれを特権化することで、逆に強く自分のイメージを特権化したのです。

カトレアの花にこめた戦略

オデットが次に取り掛かったのは、そうしてアピールされた自分のイメージを、ある特殊なモノと結び付け、モノの背後に隠れることで、そのモノに含まれる観念を自分のものにしてしまうことです。

「彼女はこういった自分の持っているシナの骨董品が『面白い』形をしていると考え、またラン科の花、とくにカトレアが面白いと言うのだった。そのカトレアはキクとともに彼女のお気に入りの花で、そのわけは、カトレアが花のようではなく絹か繻子(シュ)でできているように見えるところがたいそうよかったからだ。『この花はまるでわたしのコートの裏地から切りぬいたみたい』と彼女はスワンに一輪のランを指さしながらそう言ったが、そこにはこの『シックな』花に対するある尊敬のニュアンス、自然が彼女に思いがけなくも与えたこの優雅な妹、生物の等級からすれば彼女の足許にも及ばないけれども、しかし洗練されていて、たいていの婦人たちよりもこのサロンに席を占めるにふさわしいこの妹に対する、ある尊敬のニュアンスがこめられていた」

いかにもプルーストらしい長ったらしく、まわりくどい文章ですが、オデットがカトレアの花にこめた戦略の構造についてはよく説明されています。すなわち、オデットはまずキクを出し、次に中国や日本の骨董品を出し、自分が世間一般に通用している美学とは一味ちがった新しい「芸術的ライフスタイル」を信奉する女であるというイメージを植え付けておいてから、「彼の」紅茶でイメージを強化し、最後にカトレアを出して、それと自分を完全に重ね合わせます。映画で言えば、二重映しの技法で、カトレアと自分を隠喩(メタファー)の関係に置いたのです。『椿姫』のマルグリット・ゴーティエが白い椿と赤い椿を自分のシンボル・マークにして、ダーム・オ・カメリア(椿姫)という異名を獲得したのと同じで、オデットは、ダーム・オ・カトレア(カトレア姫)になるという戦略を立てたのです。

この戦略はじつに巧みなものでありました。なぜなら、カトレアには、優雅、洗練というニュアンスのほかに、それがラン科の花であることからくるエロティックな含みもあるからです。ご存じのように、ランというのは、その形状からして、男性器と女性器の両方を連想させるものがあります。オデットは、もちろんこうしたカトレアの属性を知っていますから、「花の露骨さに顔を赤らめ」て見せるのです。また、カトレアが花というよりも「絹か繻子」でできていて、「わたしのコートの裏地から切りぬいたみたい」と言うこ

とによって、自分の肉体との密着を匂わせます。しかし、それはあくまでカトレアというメタファーを介在させた上でのエロティシズムの喚起です。この点を間違わないでください。直接の「お誘い」は男の気持ちを委えさせることがあるからです。

ひとことで言うなら、オデットはカトレアを性的なメタファーとして使うことで、自分の肉体がスワンの好みではないことを巧みにカムフラージュし、彼をして「芸術鑑賞モード」で自分を眺めるようにしむけるのです。

もともと、「芸術鑑賞モード」に入りやすい性向をもっていたディレッタントのスワンは、まんまとオデットの計略にはまってしまいます。

二度目の訪問でオデットが見たがっていた版画を持っていったとき、スワンは、薄紫色(モーヴ)のクレープ・デシンのガウンで出迎えたオデットが版画を眺める姿を目にし、そこにシスティナ礼拝堂の壁画にあるエテロの娘チッポラとの類似を発見して驚きます。

「これまで彼がこの女をただ肉体的にしか眺めてこなかったために、彼女の顔や身体の美しさについて、彼女のすべての美しさについて、たえず疑いの念が起こり、それが彼の愛情を弱めていたのに対し、他方そういった肉体的な見方のかわりにある確実な美学の与えるものを基礎におくと、たちまち疑いは破壊されて、この愛情は保証されるのだった。むろん接吻や肉体の所有も、それが崩れた肉体によって与えられる場合はごく自然なつまらないものに見えるけれども、美術館に飾られたある作品に対する熱愛を完成するものであるとすれば、超自然で甘美なもののはずだと思われるのだった」

こうなったら、もうオデットの勝ちは確定的です。スワンは現実のオデットの肉体を見ずに、それをアナロゴンとして、「芸術作品」を見てしまっているからです。

しかし、オデットはそれだけでは満足しません。より強くスワンを捕らえるには、「芸術鑑賞モード」だけでは足りないことを知っています。恋愛というロケットがより遠くに飛ぶには、「嫉妬」という第二段のロケットに点火する必要があることを自覚しているのです。

「不在」のテクニック

アナロゴン美女たるオデットは、カトレアなどのメタファーを使って、スワンを芸術鑑賞モードにすることを得意としていました。つまり、スワンの好みではない自分の肉体の代わりにモノ(特にカトレア)を置き、肉体をその背後に隠してしまうのですが、この戦略の究極のテクニックは、肉体そのものを不在にすること、つまり、スワンの目の前から姿を消してみせることにほかなりません。

ある晩、ヴェルデュラン夫人のサロンに遅れて出かけたスワンは、オデットが先に帰っ

たことを知らされ、かつてないような苦しみを味わいます。給仕頭から、プレヴォの店でココアを飲むつもりだというオデットの伝言を受けとると、急いで馬車を走らせるのですが、どこのカフェやレストランを捜しても、オデットは見つかりません。

「彼はメーゾン・ドレまで行き、トルトニに二度もはいり、それでも彼女が見つからないので、カフェ・アングレからふたたび出てくると、けわしい顔つきで、イタリアン大通りの角で待っている馬車のところへ行くために大股で歩きはじめたが、そのとき逆の方向から来た人とぶつかりそうになった。それがオデットだった」

プルーストはこの瞬間のオデットについて「彼女はまさか彼に会うとは思っていなかったので、ぎょっとしたような身振りをした」と、意味深な一行を付け加えています。これが何の伏線であるかは後に明らかになるでしょう。

いずれにしろ、スワンは、この不安と希望の入りまじった探索の過程で、オデットを完全に所有したいという排他的な感情を抱くに至ります。わかりやすい言葉でいえば、「恋」に落ちてしまったのですが、プルーストは、この恋愛感情の成立には、オデットが「そこにいなかった」ことが不可欠な条件となったと説明しています。つまり、てっきり「いる」と思った相手が「いない」とわかったとたん、私たちの想像力はあらぬ働き方をして、経過していく時間を不安な期待で待つようになるのです。

「スワンは刻々と近づく瞬間を、レミ(御者)から、『あそこにいらっしゃいます』と言われる瞬間のようにも、また『どのカフェにもいらっしゃいません』と言われる瞬間のようにも、両方に思い描いていた」

ファム・ファタルを志すあなたが習得すべきは、この「不在」のテクニックです。すなわち、男は、あなたがそこに「いる」から恋するようになるのですが、「いない」とわかったとき、恋はもっと深まるものなのです。

この男の心理をうまく衝いたのが、オデットの用いた「スッポカシ」という手口です。携帯電話が普及したいまでは、なかなか応用は難しくなってきていますが、遠度の「不在」は男を確実に恋の深みに誘いこみます。関係がすこしダレてきたかなと思ったときには、一度、携帯の電源を切って、デートに大幅に遅れてみせるのも上策です。男の気持ちはふたたびあなたのほうを向き、恋が緊張をはらんだものに戻ることはまちがいありません。

しかし、このスッポカシは、あくまで恋をより深くするための意識されたテクニックとして使うべきです。ほんとうにスッポカシをやってはいけません。男の気持ちがさめだってきた頃に、タイミングよく姿を現してみましょう。男は最初、デートに遅れた理由を尋ねたり、携帯の電源を切っていたわけを説明しろと迫りますが、それは、恋が深まっ

たまぎれもない証拠ですから、あなたとしては、この時こそが狙い目と心得るべきです。強力なフェロモン攻撃をしかける絶好のチャンスです。

天性のファム・ファタルであるオデットは、その点は心得たものです。実は、スッポカシは意識的にやったものではなく、他の男と会っていて結果的にそうなったにすぎないのですが、状況をすばやく察するとチャンスを見逃さずに、見事な「お誘い」をかけます。

このときも、使われた小道具はカトレアでした。オデットは手にカトレアを持っていたばかりか、大きく襟ぐりの開いたデコルテの谷間にもカトレアを挿していましたが、馬車が大きく揺れた瞬間、叫び声をあげ、スワンの腕の中に飛び込むような仕草をします。すると、スワンはオデットの肩に手を回し、こう言います。

「おや、さっきがたんとした柏子に、お胸の花がずれてしまったけれど、まっすぐに直してもかまいませんか？」

もちろん、オデットにイヤはありません。スワンは今度はこう尋ねます。

「匂いをかいでも、いやじゃありませんか？　ほんとにこの花は匂いがないのかなあ。実は一度もかいだことがないんですよ。かいでみてもいいですか？」

オデットははほえみながら軽く肩をすくめただけでしたが、それはこう語っていました。

「変なかた、お分かりじゃありませんか、わたし、そうされるのが大好きだってことくらい」

以後、二人の間では、「セックスをする」の代わりに「カトレアをする」という言い方が使われるようになります。

結婚＝「真実への情熱」の行き着く先

ところが、ある晩、スワンがオデットのアパルトマンを訪ねると、オデットは今夜は気分が悪いからといって「カトレア」なしで彼を追い帰します。しかし、スワンは自宅に戻ったとき、突然、一つの考えに打たれます。もしかして、オデットは他の男を迎えいれるために自分を追い帰したのではなかろうか？　激しい嫉妬に駆られたスワンが来た道を引き返すと、案の定、オデットのアパルトマンからは明かりが漏れていました。このときのスワンの反応がなかなか見物です。

「たしかに彼は、この光を見るのが苦痛だった。(中略)それでも彼は来てよかったと思った。彼を家にいられない気持にさせた苦しみは、曖昧(アイマイ)でなくなっただけに激しさも薄れていたからだ」

この心理の微妙な綾に注目してください。たとえ、苦痛を引き起こす真実であっても、

漠然とした不安よりはましなのです。スワンにとって、一番いけないこと、それは答えがわからない宙ぶらりんな状態なのです。

「このとき彼の感じていたほとんど快いとも言えるものは、疑惑や苦痛の鎮静とは異なる何かであった。（中略）いま嫉妬によって蘇ったのは、勤勉な青春時代に彼が持っていたもう一つの能力、すなわち真実への情熱だった」

「真実への情熱」これこそが、ファム・ファタルに弄ばれた男が最終的に行き着くことになる境地です。もはや、それは恋でもなければ、嫉妬でもありません。果たして相手が自分を裏切ったのか否か、その一点が知りたいという切実な欲求なのです。

では、この「真実への情熱」はいったいどのような過程から生まれるのでしょうか？

それは、ほとんどの場合、二つに引き裂かれた空間と時間の織りなす戯れから生じます。

ここにAとBという二人の恋人がいるとしましょう。二人はセックスをしたばかりで、同じ空間と時間を所有しています。しかし、二人にはそれぞれ別の生活がありますから、どこかで「じゃあね」と言い合って別れ、空間を別にしなくてはなりません。このとき、AとBはお互いの空間から「不在」になります。しかし、ここで重要なのは、時間もまた別々になるということです。AとBは「不在」になったあとの相手がどんな時間を過ごし

たのか、それも知り得なくなるということです。

それでも、相手のことを信頼しているときには、相手が自分が予想したであろう空間の中に「いて」、そこで、予想通りの時間を過ごしたと思いこむことができます。

ところが、なにかのきっかけで、相手が予想した空間に「いなかった」ということが判明します。あるいは、そこに別の人間といたかもしれないという疑惑が生じます。このとき、自分がいまいる世界とはまったく別の、その中身を知り得ないパラレル・ワールドが誕生し、相手はそのパラレル・ワールドの住人となってしまいます。そして、それと同時に、完全に埋まっていると信じて疑わなかった相手の時間が「失われた」ものになってしまうのです。

嫉妬とはこのパラレル・ワールドの「失われた時間」に対する嫉妬、いいかえればある種の「時間の病」にほかなりません。そして、この嫉妬はなにか証拠を得ると、あたかも自立した生き物のように肥大化しはじめるのです。スワンが置かれた立場がまさにこれでした。

「彼の嫉妬は、タコが一本目、二本目、三本目とそのもやい綱のような足を伸ばすのに似て、この夕方の五時という時刻にしっかりとへばりつき、ついで別な時刻に、さらにまた別な時刻にと、吸いついた」

やがて嫉妬はあまりに肥大化しすぎたために、対象を見誤ります。つまり、もはや、オデットそのものはどうでもよく、パラレル・ワールドの「失われた時間」のみが重要になるのです。これがプルーストのいう「真実への情熱」のことです。

ところで、この「真実への情熱」を満たしてくれるのはオデットの証言しかありません。オデットがパラレル・ワールドで過ごした真実の時間を話してくれれば、それですべては解決なのです。しかし、スワンにとって、大きな障害が立ち塞がります。オデットは浮気をごまかすために、さまざまな嘘をつくのですが、その嘘に小さな事実の断片を紛れこませるのです。その結果、よけいに事態は紛糾してしまうのです。

「スワンはただちにこのような言い分のなかに、正確な事実の切れ端があるのを認めた。それは、嘘をついている人たちが不意をつかれたときに、気休めに彼らの捏造する嘘の話のなかにはいりこませ、そのなかに組み入れて、いかにも〈真実〉らしく見せかけたつもりになるあの事実の断片であった」

オデットは別段、意識してこの真実と嘘のモザイクを作ったのではありません。オデットはそれほど頭のいい女ではないのです。しかし、かえってそのことが、スワンを「真実への情熱」の深みに入りこませます。もはや、スワンは真犯人を突き止めようとする刑事、あるいは隠された真実を求める学者のようになってしまいます。この意味では、オデ

ットは天性のファム・ファタルということができます。なぜなら、スワンはオデットからなんとしても真実を聞き出し、「失われた時間」を再現するために、オデットと一瞬たりとも離れられなくなり、ついには「結婚」に踏み切るからです。やがて、結婚したスワンはこうつぶやくことになります。

「まったく俺ときては、大切な人生の数年を無駄にしちまった、死のうとさえ思い、あんな女を相手に一番大きな恋愛をしてしまった。俺の気に入らない女、俺の趣味でない女だというのに！」

「在／不在」の戯れを自由自在に駆使できる女、オデットこそは『失われた時を求めて』の最終的勝利者です。嫉妬は愛より長生きします。そして、真実への情熱は嫉妬よりも長く続きます。女はすべからくミステリアスでなければなりません。